

題字 寺山 日中

# 色紙に書く 七生報國の鉛

## 「七生報國」

自分は如何に生きるか。その思いが、武道を追求する動機となり、大学を卒業し社会に出る時点で、武道に生きようと決意した。私にとって、武道に生きるということを、最も強く端的に象徴している言葉が、「七生報國」である。

私が目指す武道は、「まごころ」を全うする生き方。「まごころ」とは、万物に内在する神に通じるモノで、それを正氣、誠、良知等と言い表すこともある。神とは、宇宙・自然の権理といつていいくかもしない。いずれにしても、私は、「まごころ」

を活かすために生きるように努め、肉体の欲求を満たすために生きるということはしたくない。

「まごころ」を全うして生きようすれば、まずは、自らの邪氣を祓わなくてはならない。その上で、邪気に犯された他者の心も正す必要が出てくる。しかし、そこで問題が生じる。相手の邪気を祓おうと思うと、場合によつては、戦いが生じるかもしれない。しかも、邪気に満ちた相手が、權威、權力あるいは暴力などを備えていると、自らの地位、財産、場合によつては生命をも

荒谷 卓



荒谷 卓 (あらや・たかし)

明治神宮武道場至誠館館長。昭和34年(1959)秋田県生まれ。大館鳳鳴高校、東京理科大学卒業後、昭和57年陸上自衛隊入隊。福岡195普通科連隊勤務後、ドライイッシュ連隊軍事指揮大学留学。陸幕防衛部、防衛局防衛政策課勤務を経て、米国特殊作戦学校留学。帰国後陸上自衛隊特殊作戦群初代群長。平成20年退官。平成21年第三代至誠館館長就任。予備役アルトリボンの会顧問。最近の著書「戦う者たちへ」(並木書房)。

犠牲にせざるをえない状況もありうる。それを覚悟して「まごころ」を生かすか、「まごころ」を捨てて利益を取るか。大きな決断をする。武道では、迷わず前者の「まごころ」を生かす道を選ぶように決断力と実行力を鍛える。日本武道の特徴ともいえる入身、捨身は、そこを練ることで到達しうる境地である。

ところが、今の憲法では、後者を是として教育している。いわゆる、生命、安全、財産の保全は神から与えられた権利であるという自然権の発想である。

私は、自然権に基づく憲法精神に生きることを嫌った。自衛隊に入隊し、そして明治神宮至誠館に奉職したのも、日本人として

て武道を実践する場所を求めてのことである。一千数百年にわたり、神代から綿々とつながる国柄のうるわしき日本。その日本

の伝統を継承するため、「まごころ」をつくして自らの生命までも捧げた先人たちがいたからこそ、今も日本が存在する。どこ

ろが、戦後日本の状況を見るにつけ、邪氣に覆われた現状が日本だと思われたまま滅んでいくのは耐え難い。日本の真の姿を取り戻し、その精神と文化的価値を世界に示さなくてはならぬ。

湊川の戦に敗れ、自決を決めた大楠公、楠木正成公が弟正季公に最後の一念を問うと、「七生まで同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼさんとこそ存じ候べ」と答えるに、世にもうれしげな様子で「われもかように思うなり。いざさらば同じく生を替えて、此の本懐を達せん」と答えて誓い、兄弟共に刺し違えて倒る。太平記に記された大楠公の最期である。

己が肉体を幾度滅ぼしても、忠義の精神を貫徹する清く武き「まごころ」を、生き方と死に方を通じて示した格別の重さが「七生報国」という言葉にはある。私が、座右の銘とするゆえんである。

180ページに色紙プレゼントの応募要領が載っています。

